

# あの世からの“お迎え” ～穏やかな看取り（みとり）とは～

今年7月肺がんで、この世を去った母親のお迎え体験に立ち会った女性。隣で寝ていた母親が突然話しかけてきたのは亡くなる5日前の夜でした。



娘：『お友達がさっき来たでしょ』と言うの。『えっ、来たの』って言ったら『うん、さっき来たんだよ』って。そのお友達は7年前に病気でなくなっているんです。ちょっとこっちはギョッとしてるんだけど、あまりにも幸せそうに話をするの。4年前にがんが見つかって以来まだ死にたくない、と言い続けていた母親 鈴木靖子さん。それが、お迎えを見たあとは心が落ち着き、穏やかに旅立っていったといいます。



鈴木章子：「死に対する恐怖も当然あったんだけど、それが何か薄れていったんだよね。」 鈴木万里：「そういう風に（恐怖があるように）感じなかったね。」

鈴木章子：「死に対する恐怖は、まったく感じなかったね。」 鈴木万里：「私はもう、自分自身が死ぬときは、母のように亡くなりたいなって。」

仙台を中心に在宅医療に取り組む医師の河原正典さんです。在宅医療を続ける中でお迎え現象は珍しいものではないという意外な事実気がついたといいます。



この日は3年前に肺がんが見つかった88歳の沼田いなさんを訪ねました。河原正典さん夏バテしてないかい？昨日の夜ちょっと涼しかったね。」沼田さん「うん。」沼田さんは去年11月肺炎を起こし、一時危険な状態に陥りました。そのとき、亡くなった両親が部屋の隅に現れたといいます。

沼田さん：「親と会ったんだなという感触だけなんだな。お互いに離れ離れみたいになって会うんだから、うれしいような気がするんだな。」河原正典さん「人によっては先生が来るまでいたのになって言われて怒られたこともありましたし。ちょこちょこ、ありますよ、そんな珍しくはないですね。」あの世で懐かしい人に会える。そう思うことで、死への恐怖が和らぐのではないかと。河原さんは、これまで現代医療が目指してこなかった効果が、このお迎え現象にあるのではないかと考えるようになりました。

河原さんのグループでは去年、社会学者と共同で本格的な調査を行いました。対象は宮城や福島の在宅緩和ケアを利用した患者の遺族、500人以上。すると、全体の4割でお迎え現象を体験したという回答が得られたのです。最も多いお迎えは両親や友人などすでに亡くなった人たち。猫や犬など飼っていたペットや動物が現れる場合もありました。そして、懐かしいふるさとの山々など思い出の風景を見ることも。こうしたお迎えを見た9割の人が穏やかな最期を迎えたことがうかがえるとされています。お迎えという不思議な現象。医学的に見ると一体何が起きているのか。河原さんは、お迎えは穏やかな死のために準備された人間の生理現象なのではと考えています。

平成30年3月24日 清浄院 堤 忠春